

## 論文要旨

学位論文題目：集団保育における子どもにとっての食事場面の意味と「楽しく食べる」こと  
—管理栄養士によるフィールドワークからの検討—

氏名：吉田隆子

### 問題と目的

食育基本法（2005）制定以降、保育所、幼稚園、認定こども園のいずれでも、食育が重要視されるようになり、子どもが「楽しく食べる」ことが求められてきた。保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領のいずれでも「楽しく食べる」ことを目指す記載がある。食育基本法及び関連する法律・指針の中では、食を通じた子どもの健全育成（—いわゆる「食育」の視点から—）のあり方に関する検討会報告書（2004）、及び保育所における食育に関する指針（2004）に、「楽しく食べる」子どもの姿が詳しく記載されている。しかしそこで示された「楽しく食べる」子どもの姿は大人の期待する姿であり、「子ども自身にとって楽しい」という観点とは別のものである。

集団保育における幼児の食事場면을扱った先行研究からは、観察・インタビュー・質問紙によって、「楽しく食べる」ことに関連する示唆が得られてきた。総じて、他の子どもとの共食や子ども同士のやりとりが子どもにとっての食事場面の楽しさに関連すること、食事の好き嫌いや遅さに関する保育者からの注意は食事場面を楽しくなくすること、子どもが「食べる」「楽しむ」「学ぶ」という複数の行為を同時並行的にできるよう配慮する難しさを保育者が抱えていること、食事場面は保育者と子どもの欲求が対立しやすいことなどが示唆されてきた。しかし子どもの視点から見た「楽しく食べる」ことや集団保育の食事場面の意味に関して、実際の子どもの姿から明らかにした研究は十分に蓄積されていない。

本研究では、子どもが「楽しく食べる」ことに焦点をあて、集団保育における子どもにとっての食事場面の意味を明らかにすることを目的とする。このためにフィールドワークを行い、集団保育の食事場面での子どもの姿を捉える。

### 方法

フィールドは幼稚園・保育所各1園である。園での食事場면을ビデオカメラで撮影するとともに観察メモを取り、そこから観察記録を作成した。観察を補足するため園長や担任から聞き取りを行い、園での各種文書（食育実践記録等）を収集した。園での食事場面との比較のため、協力の得られた対象児1名については家庭での食事場面についても観察した。

### 結果と考察

本研究は二つの研究から構成される。

第1研究では、幼稚園・保育所において、「園長や保育者から園での食事に問題があるとされる子ども」、各園1名の食事場면을観察し分析した。2名の対象児は摂食が進まず、保育者から繰り返し摂食に関し

て注意や促しを受け、楽しそうではなかった。楽しそうだったのは他の子どもとおしゃべりするときや、保育者に褒められたときなどに限られた。対象児1名の家庭での食事場面では、園とは大きく違った姿が見られた。対象児は楽しそうであり、自ら積極的に食べ、食事を終えるまでの時間は短かった。親とはコミュニケーションが多くあり、話題は多岐に渡っていた。楽しい雰囲気のやりとりが多く、自由に振る舞っており、親からの注意は少なかった。家庭での食事場面との比較から、園での食事に問題があるとされる子どもにとって、園での食事場面は、大人とのコミュニケーションが少なく、話題も限られ、やり取りに楽しい雰囲気も少なく、大人からの注意が多く、自由が少なく、楽しくない時間が長く続く場と考えられた。保育者の摂食への注意や促しの背景には、小学校の要請に配慮した「学校時間」（小学校の給食時間を考慮した完食までの食事時間）の存在、栄養摂取のための完食への責任感があると考えられた。これが保育者にとって負担となっていることも窺われた。

第2研究では、保育所において、「園長や保育者から園での食事に問題がないとされる子ども」の園での食事場면을観察し分析した。対象児たちの関心は主に周りの友だちに向かっていった。友だちと直接話したり、共通のものと一緒に反応したり、友だちを笑わせたりなど、周りの友だちと直接関わるときに楽しい様子が見られた。友だちの様子を見たり周りの賑やかさを感じたりなど、間接的な関わりを楽しむ様子も見られた。このように園での食事に問題がないとされる子どもたちにとって園での食事場面の楽しさは、主に友だちとの関わりにあると考えられた。日常的な保育者の関わりは、主に食事開始冒頭や学校時間近くになったときに、クラスに向けて学校時間を確認する関わりであった。また、学校時間を超えた子どもたちに対して、保育者は必ずしも注意するわけではなく、あまり食事が進んでいない場合のみ注意していた。一方で、子どもたちは学校時間を自らは意識していないように思われた。保育者が学校時間を確認したときに気にかける様子が一部に見られた程度であり、確認に全く関心を示さない子どもも多かった。子どもたちは自分なりの速さで食べることを優先しているように思われた。「学校時間内の完食」は園での食事場면을規制している。しかしこの規制の元で、子どもたちは規制に単に従うのではなく、自分なりの速さで食事を進めること、友だちとの関わりを作り出して楽しむことを優先し、食事場면을自分たち自身の関心に沿った場になっていると考えられる。こうした子どもたちの楽しさを支えているのは、保育者の規制の緩やかさであると考えられた。

## 総括

子どもたちにとって園での食事場面は、園生活の流れの中にあり、自分たち自身の関心にそって過ごす場、具体的には、自分なりの速さで食事を進めるとともに、友だちや保育者との関わりを作りだして楽しむ場という意味を持つと考えられる。こうした子どもにとっての食事場面の意味を実現し、子どもが「楽しく食べる」ためには、子どもとどういったコミュニケーションを取るか、規制をどの程度子どもに向けていくかなどといった保育者の関わり方が重要であると考えられた。管理栄養士・栄養士は、以上のような子どもにとっての食事場面の意味と保育者の関わりについて理解した上で、園での食事に関わる必要があると考える。